（様式）

京都大学若手人材海外派遣事業　ジョン万プログラム
研究者派遣プログラム

成果報告書

提出日：平成 25 年 3 月 27 日

1．渡航者			
氏　　名	半谷吾郎	採択年度	平成 24 年度
部　　局	霊長類研究所	電　話	
職　　名	准教授	メール	
研究課題名	旧世界霊長類の群集構造と資源制限の比較研究		
海外渡航期間	平成 24 年 12 月 11 日～　平成 25 年 3 月 15 日		

2．渡航に関する情報	
渡航先	国名：カナダ 大学等研究機関名：　McGill University 研究室名等：Department of Anthropology and McGill School of Environment 受入研究者名：Colin A. Chapman
渡航期間中の出張 （渡航期間中に一時帰国や学会参加等の目的で短期の出張があった場合、その目的、行き先、期間を報告して下さい。） ※複数回に渡る場合、適宜行を追加して下さい。	出張先：アメリカ合衆国ボストン（Boston University/Harvard University） 目的：研究打ち合わせおよびセミナー発表 期間：2013 年 2 月 6 日-2 月 10 日 出張先：アメリカ合衆国 New Brunswick（Rutgers University/City University of New York） 目的：研究打ち合わせ、霊長類の英表評価のための実験手法の習得、およびセミナー発表 期間：2013 年 2 月 25 日-3 月 9 日

3．ジョン万プログラムによる成果 以下の項目について、渡航期間中の成果、または今後見込まれる成果を具体的にお書き下さい。 ページ数については増加してもかまいません。	
国際共著論文の執筆 （論文の題名、雑誌名、共著者名、刊行予定等）	"Assessing the impact to the ecosystem of folivory and frugivory by Japanese macaques in Yakushima"　(Goro Hanya, Mieko Fuse, Shin-ichiro Aiba, Hino Takafumi, Riyou Tsujino, Naoki Agetsuma and Colin A. Chapman) 屋久島のニホンザルを対象に、群集全体としての採食量が、森林の生産量に対してどれだけの割合を占めているかを定量化し、霊長類がどれだけのインパクトを森林に与え、どの程度資源制限を受けているのかを分析した論文。滞在期間中、対応者が行った先行研究を参考にしながら、対応者からの助言をもとに分析を行い、原稿を執筆した。現在、共著者による回覧中で、平成 25 年度初頭に学術雑誌に投稿する予定である。

（様式）

更なる外部資金獲得に繋がる国際共同研究の立上げ／実施 （国際共同研究の内容、実施計画、応募予定の外部研究資金等）	該当なし
国際研究ネットワークの新規構築／深化 （参加した学会やその他の学術・交流組織、そこから構築／深化した研究ネットワークの内容等）	対応者に加えて、以下の研究者と研究打ち合わせを行った。Boston University、Cheryl Knott。Harvard University、Richard Wrangham。Rutgers University、Erin Vogel。City University of New York、Jessica Rothman。いずれも、アジア・アフリカの熱帯林で霊長類の長期調査を行っており、長期調査地の維持について意見交換を行った。また、霊長類の生息環境の長期変動、およびその影響額的観点からの評価について共同研究を行うことを、それぞれ、Erin Vogel と Jessica Rothman と合意した。 McGill University、Harvard University、Rutgers University、New York Consortium for Evolutionary Primatology でセミナー発表を行い、派遣者らが屋久島で行っているニホンザルの長期野外研究を紹介した。いずれも、環境の違いが霊長類の社会変動に影響を及ぼす明確な事例として、高い評価を受けることができた。
在外研究経験による研鑽 （渡航先機関で得た研究の展開方法、研究室の運営方法、教育方針・人材育成方法等）	対応者の研究室のほか、McGill University の Department of Biology のラボミーティングにオブザーバとして参加し、各大学院生の研究の進捗状況、外部資金獲得の状況、ボランティアの学部生のリクルートなどについての議論に参加した。派遣者の研究室では、個々の大学院生は個別に研究を進めており、研究について、そのサイエンスとして以外の側面についても、研究室メンバー全員で話し合うのを、興味深く観察した。 McGill University で行われる学部学生のための講義を、講師の許可を得て3回聴講した。講義のスタイルは京都大学のものと大きくは変わらなかったが、学生の半分以上が自分のノートパソコンを持ち込んで、それでノートを取っていることが、派遣者自身が京都大学で行っている講義との、大きな違いであった。学生は講義のスライドを事前に入手しているので、本来であれば、ノートを取るためには必要最小限の手間で、効率よく講義を聞けると考えられるにもかかわらず、スライドの文字をそっくりそのまま写し、それが終わったら Facebook やゲームを始める学生も多かった。 Boston University の Cheryl Knott 博士からは、インドネシアのオランウータンの長期野外調査の資料を、どのように収集、管理しているのか、その実際を見せてもらった。実際の紙ベースの膨大な数のデータシートから、どのように効率的にコンピュータ上のデータベースに入力し、多岐にわたる情報をどのように統合して管理するのか、また長期データの収集のために、インドネシアでの長期調査地の管理及びデータ入力スタッフの管理の両方で、どのような努力が必要となるのかについて教示を受けた。派遣者の行っている屋久島の長期調査地の管理方法を考える上でも、重要な教訓を学ぶことができた。

（様式）

フィールド研究 の進展 （渡航先国で実施した 実地調査や文献調査 等の内容）	該当なし